『ごろ寝のエネルギー』（3年－鈴木 道夫）

「ああ――眠くもないのに何故寝ているのだろう。俺は死ぬまでこのまま寝ているのではないだろうか。」…そんなとき、じわじわと『ごろ寝のエネルギー』が湧いてくるのです。

小学校の頃－退屈な学校－いろんなことがあったけど、やっぱし自転車の遠乗りが一番思い出に残っている。中でも小学校4年の秋－友達と3人で、あの子供用自転車に乗って、隣り隣りの市、袋井の油山へ行ったこと――土曜の午後だったっけ。リーダー株の大橋と、なまいきな北山と、「油山に栗拾いに行こうぜ」ということになって、せっせ、せっせとよく行ったものだなあ。向こうに着いた時にはもう陽が傾きかけていたっけ。野生の栗はあんまし大きくなくて少々がっかりしたけど、あの時間の陽射が一番好きなのです。何か心が休まる－それでいて、すぐ後に夕暮れの寒さが待っている。暖かさ、平穏な気持ちの中で、常にまた次のことを気にしていなければならない。だからこそ安らぐのかも――。

結局帰り道は暗くなった。途中で北山のボロ自転車のチェーンが外れたっけ。家に着いたのは7時頃、もう少しで警察に連絡するところだったとか。土曜の朝、計画していたのを、おしゃべりの○○が聞いていて、告げ口したらしく、ヒステリーのム△という女教師がひつこく父兄会で喋り続けたらしい。しかし、どういうわけか、そんなこと気にかけた覚えもなく、ただ充実感だけが残ったようだ。

中学校のとき、一年の夏休みに御前崎までサイクリングに行ってきた。せっかく海パンを持って行ったのに台風の影響で波が高くて下に降りられず、仕方がないので御前崎ランドの小さなプールで泳いだ。一緒に行った友達の親戚が近くにあり、立ち寄ってファンタグレープを飲んだのだが、あの頃は、合成着色料のことなんか全く気にしておらず、最も好きな飲み物だった。——

3年、秋—10月—高校受験を前にして、2度目の実力テストやらが終わった頃—あの頃は非常なスランプ状態であった。この業者テストで行き先が決まるのであるが、成績は極めて不振。夏休みの勉強時間0が響いたのである。—その時、これまた、あまり振るわなかった友達と3人で佐久間ダムにサイクリングに行った。急な登りを、自転車を押してダムに行ったら、湖水に船が出て回りに店が出て、お祭りのようだった。辺りに爆竹の音が鳴り響いた。

中学にもなれば、いろいろと考えてみるものである。ぼくはこの頃、自然と人間について考え始めていた。ぼくは、あの頃植物栽培が趣味であった。植物栽培といっても盆栽とか生け花などは非常に嫌った。中学3年の時、学校でグループノートというのがあったが、その中で、「生け花なんていうのは完に花の間違いである。せっかく"生き生きと"咲いている花をチョン切ってきてさすとは何ごとかと非難したことがあった。また、新聞に長い年月生き抜いてきた老松をたたえて、"盆栽のように素晴らしい"と評した記事が載ったときには、「まったく、倒錯した記述だ。」と文句を言

いに行ってやろうと思った。(が、やめた。)
要するに、自給自足で生き生きと生きている植物が一番、素晴らしいと思った。それから、好きで植物を殖やしていて気付くことは、すぐに庭が一杯になってしまうということである。そして知り合いの人にあげても、やっぱりすぐに限界に達してしまう。そして、そんな頃、生態学みたいなものを知って、自分のしていることを見つめ直した。――お前の可愛がっている植物なんて、植物のうちのほんのわずかだ。結局、お前は、少しばかり見映えのよい植物を殖やして、自己満足しているだけだ。本当に自然を愛するということは、本来の自然をそのまま残すことだ。――こんなことを考えた。
また、ここで人間が地上に誕生してから今まで、どんなことをしてきたかを考えた。ぼくは、それ以前は、人間は最も優れていて、動物とは違うんだと思っていた。確かにそうであるが、人間は優れているだけの存在なのか？よくあの頃は、人間と他の動物と比較して、「動物は、自分の生きていくためにしか殺さない。しかし人間は、趣味で動物を殺したり、ひどい場合には人間同志で殺し合ったりする。」という議論をする人がいたが、ぼくも、それを考慮して、人間は確かに知性は発達しているが、果たして優れた存在といえるのだろうかと考えた。

高校時代――水窪(みさくぼ)ダムへ行った。佐久間ダムより奥の方にあるダムである。――他にも行った。しかし、いつも必ず立ち寄る場所と町がある。それは、最初に天竜川を渡ったところの小さな山の上

にある鳥羽山公園と、その向こうの町である。鳥羽山公園に夏休みの始まった頃行くと、丁度山百合の花が咲いているのです。名百合の花もあるけど、やはり、あの甘い香りのする山百合の花が好きなのです。ある時、ある女性(全く覚えていない)が、陽を浴びて輝やく山百合の花を写生していた。また、その向こうの町で一番思い出に残っているのは、早朝、行先(佐久間ダム)へ向かって走っていったとき、カーブを曲がったとたん、目の前に朝日が立ちはだかったときのこと、やはり朝はいいものだ。(なのに最近は、なんてぐうたらなんだろう。)一夏の花で好きなのは、この山百合の花と、合歓の木の花(雄しべ)のお白粉のような甘い香り…女性の匂いのような気がする…です。静かな小川のせせらぎと、それと対照的なせみしぐれ、杉の木の影は涼しいのです。そんな中でふと、合歓や、山百合の香りがして、陽が射したときのフィーリングは何ともいえません。自転車をこぐ頃の汗もすがすがしく感じます。最近では、夏に帰る度に、何となく足く自転車が向くのです。

高校時代は、何といっても勉強のことを中心に考えていた。歩きながら数学の問題を考えている時もあった。大学こそは、自分の決めた大学に絶対に入るんだと決心してがんばった。そのとおりになったし、自分で選んだ道なら後悔することもない。

中学時代に考えていた自然と人間の関係について…は、根本的に変わりはなかった。しかし、人間も一生物として生きるしかないというのが結論であった。

東工大に合格した。そして、友達と伊良湖岬へ行った。この伊良湖岬もいろいろな思い出がある。……しかし、この時は、非常に疲れたというのが実感であった。（学生部が事故したのは、ここへいく途中だった）

東工大に入学した。（81年度）サイクリング部に入ることは始めから決めていた。だから別に説明会も出なかった。しかし、部室の様子――雀卓やパチンコ台など――を見てしばらく敬遠していた。が、結局、新歓コンパの当日に入部した。あのときは、もう101教室でみんな集まっていて、部室（旧）前にぼくがいたら藤原さんが来て、誘ってくれた。101教室では、沢木さんにクラブの説明をしてもらったのであるが、何か、でかいにきびが出きており、変な人だなと思った記憶がある。まあ、コンパの当日に入部するとはついていた。（あの頃から、桶島は変わらないなあ。それから大塚は経営に行くと言っており、ぼくが迷っていたら、「意志弱」とたしなめられたのであるが、あれから、もう2年以上たちましたねえ――。）

東工大サイクリング部での思い出は来年書くことにしよおっと――。

さて、またも自然と人間の関係に戻ります。というより、まず統一協会とのことから――あれは去年の私、ぼくは、あることが契機となり、統一協会の人々と仲良くなった。その中でも自然と人間については語り合ったのです。まず彼らの教義では、（これはTさんという女性が説明してくれた。）神が、真・善・美（こういう言葉が非常によく出てくる）、の対象として、被造世界（宇宙）を創造なされ、万物は神が人間のために創って下さったというのである。彼女は、映画「アドベン

チャー・ファミリーの中で、冬、食事が無くて困っているときに、子供連れの母親鹿を獲えて食べたのであるが、その時、子供が、両親に「母親鹿を殺してしまったら、この子供達は雪の中で死んでしまうんじゃあないの」と尋ねたところ、「この鹿はね、神様が私達のために授けて下さったのよ、この鹿は私達に食べられるために生まれてきたのよ」と言った、というシーンを例にあげて説明したのである。要するに、動物も、植物も人間のために創られたものであり、食べられるために生まれてきたというのである。この部分こそ、ぼくが、この教義の中で一番気に入らなかったところである。全く、人間が生きていく上で、ある程度の傲慢さは必要であるが、程があるというものである。そこでぼくの自然感というものを説明してあげたのであるが、わかるけど、それは正しくない（原理と違う）。原理が真理だというのである。全く、一つの宗教や、思想にかぶれた人とは話しても通じえない。また、これと全く対照的で、その傲慢さだけは同等である思想がある。それは、「人間があらゆるものの主人であり、すべてを決定する」ということを哲学的原理としているのであるが、よくぞ言ったものである。やはり、ぼくとしては、まず、人間同志だけでなくて、他の生物へも同様に愛着を感じてあげて、人間も、一生物として、なるべく自然を破壊せず、また、人間の生きていくために他の生物を犠牲にする場合でも、上にあげた例のように考える人間にだけはなりたくないと思うのである。しかし、哲学的に違いはあっても、ぼくが考える、「自然と人間の

調和した状態」と彼らが考えるそれとはほとんど同じである。これは一般的に言えることであり、お互いが、哲学の相対性を認めず、思想的疎外感をぶつけ合うのが最もよくない。現在、あまりに多くの集団がその過ちを犯している。しかし、この不確実性の時代には、そういった独善性こそ勢力の推持・拡大のための必要条件となっており、結論的には、そういった集団とは関わらないのが一番よいということになる。（まあ、このことは主題でないのでこの位にして…）

要するに、今、残された自然は出来る限り守っていくと共に、そうでないところは、第二の自然（堀辰雄が『浄瑠璃寺の春』の中で使ったことば）を目指した環境づくりを考えるべきなのである。

サイクリングはいい―。ぼくは、サイクリングに行くとき、いつも何か、こころの高揚というか、冒険的なものと、何ともいえない気楽さを大切にしてきた。また、これからもそのつもりであるし、登山をする場合でも同じような気持ちで行くと思う。（勿論、厳しさもあるが）

また、"ごろ寝のエネルギー"を発散させる場として、いつも山や見知らぬ町への旅を選ぶとは限らない。例えば、自分の何かやりたいことが他にあって何か月も、何年も行けなくなってしまうこともあるかもしれない。しかし、一生涯通じてみると、山に行きたくなったとき、遠くの町へ行きたくなったとき、快適な気分で行けるように体調を整える（体力をつけておく）ことの重要性をつくづく感じる。今日、この頃である。またこのエネルギーの源として、一緒に書いた自然感、そして現代という時代の要求があるのです。（眼